現代社会における観光地のあり方について
－観光に消費されないための地域づくり－

飯田　匡亮
教科領域コース

序章　はじめに

観光によって地域を活性化する。これは、「観光立国」を宣言している日本にとって理想であり、多くの地域が目標としているだろう。観光庁では2017年から小・中・高等学校における観光教育事業に取り組み始め、「観光教育モデル事業案」を作成するなど、学校教育の中にも観光を取り入れていこうとする動きが見られる。また、小・中学校の地域学習においては、どのようにして自分の地域（あるいは地理の中で取り上げられる地域）に人を呼びこむかを考えることはよくあるだろう。

では、ここで一つ問いたい。「観光とは、地元に住む人々に幸せをもたらすのだろうか。」経済が活性化したり、自分の地域の魅力を知ってもらえたりなど、良い影響はもちろんあるだろう。反対に、渋滞やゴミ問題など、地域住民の日常生活を脅かしてしまう危険性もある。その魅力的で厄介な観光と地域はどのように付き合っていけば良いのかを本研究では論じる。１・2 章は文献調査を中心に、３章では千葉県香取市佐原でのフィールドワークを基に行った。

第１章　観光とは

「観光」の定義について、世界観光機関（UNWTO）は、「1年を超えない期間で、余暇やビジネス等を目的として、居住地以外の場所を訪れて滞在すること」としている。日本では、1995年の観光政策審議会の答申「今後の観光政策の基本的な方向について」にある定義がしばしば参照されており、「余暇時間の中で日常生活圏を離れて行う様々な活動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とするもの」としている。

一方で、2006年に旧「観光基本法」を全面改正して制定された観光立国推進基本法には、定義や規定が存在しない。ここで重要なのは、日常・非日常、労働・余暇といった枠組みの境界が揺らぐボーダーレスな社会において観光は多様化しているということだ。明確な定義づけが難しい観光において、それを現象と捉えるのであれば、社会状況の影響を受けやすいものなのではないだろうか。COVID-19の流行により、グリーンツーリズムなど大勢の人との接触を避けるような観光者が増えたことは記憶に新しい。それぞれの時代の特徴に合わせた観光が登場してきた。

第２章　観光地化とオーバーツーリズム

本章では、観光地化の要因とそれに伴うオーバーツーリズムについての考察を行っている。

観光地を観光地たらしめるものは何か。それは、社会や制度の裏付けによるものだといえる（アーリ(2014)より）。観光需要の多様化、SNSやメディアの発達した現代社会においては、そういった影響がより顕著に見られるようになった。その結果、ある地域が観光地化するにあたっては、外部の要因が強く、その地域や地元住民自身ではその動きをコントロールすることが難しくなってきて

いる。さらには、他の観光客とは違う体験、自分だけの体験を求めて、観光客の足は徐々に地元住民の生活圏へと向かうようになっていった。美しい田園風景が観光名所となっている北海道美瑛町では、“農地”という地元住民にとっての生活の場が観光客によって脅かされてしまったことが問題となった。さらに、住民が描いていた「美瑛＝沢のまち」といったイメージが、観光客やメディア等の影響によって、「美瑛＝丘のまち」と塗り替えられてしまう事態まで起こってしまっている。

観光地への負の影響を表す言葉にオーバーツーリズムというものがある。オーバーツーリズムとは、「特定の観光地において、訪問客の著しい増加等が、市民生活や自然環境、景観等に対する負の影響を受忍できない程度にもたらしたり、旅行者にとっても満足度を大幅に低下させたりするような観光の状況」という定義がしばしば参照される。とりわけ問題となるのは住民の生活の“質”である。旅行者にとっては、必ずしもそうとは言い切れるわけではないが、観光の目的地は代替可能である。一方で、住民にとってはその地は唯一の故郷であり、代替することは不可能に近い。

オーバーツーリズムとは、観光入込数が迎え入れることのできる人数のキャパシティを超えてしまうということが一般的であるだろう。しかし、地元住民の心のキャパシティを超えてしまう場合にもオーバーツーリズムになりうるのではないか。美瑛の事例も、人数のキャパシティオーバーが基本となって起こっているが、地域のイメージが観光によって塗り替えられてしまうことによって、地元住民の困惑も生み出しかねない。観光と地域の共存というのは理想でもあるが、オーバーツーリズム等の問題を考えるときれい事にも考えられる。次章では、美瑛と同じく住民の生活圏が観光資源となった千葉県香取市佐原という地域を例に持続可能な観光地づくりについて検討している。

第 3 章　佐原の観光

第 1 節　佐原と重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）

千葉県香取市は、江戸時代は商人のまちとして栄え、その風情が現在も残る伝統的な地域であり、その町並みが観光資源となっている。1996 年に重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）の選定を受けたことをきっかけに、町並みや文化の保存を基盤としたまちづくりへとシフトしていった。

1975 年、文化財保護法が大幅に改正された際、有形・無形の「民俗文化財」と共に、伝統的建造物保存地区（伝建地区）の制度が創設された。文化財は、ある固有のモノ・コトを対象としているが、伝建地区の制度においては、ある程度の広がりを持った地区や町を対象としている。伝建地区を市町村が像例によって定め、その中でも特に国が重要だと認めるものが重伝建地区となる。

第 2 節　佐原の伝統とその観光化について

伝統と観光地が生まれるルーツは似ているのかもしれない。塚原（2017）によると、「私たちは何の根拠もなく、印象や雰囲気のみに基づいてそれを「伝統的」なものだと判断することができる」という。伝統も観光と同じく、社会や制度に裏付けされてその意味が強化されていく場合が多い。特に、文化財保護法といったように、伝統に対しての制度の裏付けはとても大きい。それらの発生要因は外部にあることが多いのだから、地元住民が従来思い描いていた地域像とは異なるものが誕生してしまう可能性だってある。

しかし、佐原のまちはそういった様子があまり見受けられない。それは、「（NPO 法人）小野川と佐原の町並みを考える会」の存在が大きい。1991 年に発足し、佐原の市街地に流れる小野川とその

周辺の町並み保存を目的として今現在も活動を続けている。重伝建地区の選定についても、住民合意のための当会の努力が大きい。

また、伝統と観光のルーツが似ているのだから、佐原のまちにも観光客が訪れるようになった。一方で、佐原の町並みは観光地らしくもあるが、観光地になりきれていないという印象を受ける。それは、観光需要に対してまちの変化の様子にある。町並み保存については、“ホンモノ志向”というモットーで、観光地らしい雰囲気（佐原であれば歴史的な町並み）の統一を無理に図らずにありのままを残してきた。

第３節　滞在型ホテルの可能性

第１項　滞在型ホテル「NIPPONIA SAWARA」設立

2015 年に REVIC（地域経済活性化支援機構）より地域活性化に向けた「千葉・江戸優り佐原　観光活性化ファンド」の立ち上げに関する協議を受けて、スタートした事業である。REVIC とは地域経済を活性化することを目的としていて、地域の金融機関と協力して資金の投融資や地域活性のためのノウハウを共有することによって、持続可能な地域活性化を目指している。宿泊を伴う「滞在型観光」への転換のために当ファンドが出来上がった。その後、2018 年には「NIPPONIA SAWARA」が開業し、空き家や蔵を改築した一棟貸しの分散型ホテルとして今日まで営業を続けている。

第２項　「NIPPONIA SAWARA」設立に対する住民の反応について

「NIPPONIA SAWARA」の運営については、外部の人材を中心に行われており、商家の改築についてもその外部人材の考えのもとに進められていった。今まで佐原の伝統的な町並みとそれを生かした町づくりは、「小野川と佐原の町並みを考える会」を中心に地元住民の手によって行われてきた。このような流れは、今までにはないものであり、期待値が高まる一方で批判や懸念の声も多く上がった。その批判や懸念は、佐原の“ホンモノ志向”と企業の“経営志向”の違い、住民合意や説明会等の少なさ、地元旅館に宿泊する観光客の減少の３つである。

第３項　「NIPPONIA SAWARA」設立後の町の変化

この動きはやはり佐原に新たな展開を与えた。何より一番の変化は、「滞在型へのシフト」が成功したことだ。この影響は宿泊業だけでなく地元の飲食店にも及び、特に、夜営業をする飲食店が増えたという。また、経営的な面だけでなく、町の雰囲気にも影響を与えている。通過型観光が特徴であったということもあり、日中以外は閑散としていた。しかし、現在では早朝は浴衣や着物を着て歩く人が見られ、夜には小野川周辺がライトアップされるようになった。今までにない魅力を外部企業や観光客に見出された佐原という地域は、「NIPPONIA SAWARA」を受け入れつつある。

それから、前項に述べた批判や懸念点については、同社の事業やリノベーションのコンセプトが“ホンモノ志向”と一致したこと、地域に与える影響が大きくならないために事業を小規模から徐々に拡大していくこと、元々少なかった宿泊客の増加による相対効果が期待できることから、良い方向へと向かっていると考えられる。

第４節　佐原の特性と持続可能なまちづくり

佐原という地域を語る上で、「佐原の大祭」の存在は欠かせない。「佐原の大祭」は300年以上の歴史がある山車祭りである。こうした伝統的な催し事で必ず問題になってくるのは「人手不足」であろう。佐原は、この問題について近隣の地域からの協力を得ることで対応している。山車祭り経験がある若手の協力を積極的に仰いでいる。また、経験の有無に関わらず「来るもの拒まず」という姿勢で運営を行なっている町内がほとんどであろう。

「佐原おかみさん会」の存在もまちづくりに大きな影響を与えている。佐原の町中で商売を営む男性の“おかみさん”が集まって当団体は作られた。まちづくり関係者の話によると、地元男性住民主体のまちづくりに新たな息吹を吹き込む存在となっていることがうかがえる。

このように、古い考えに凝り固まることなく、外部の意見や協力も取り入れていくという柔軟性も滞在型ホテルの受け入れにつながったのではないだろうか。一方で、佐原の人々は、「佐原の大祭」や伊能忠敬といった地元の象徴を大切に守り、次世代へと受け継いでいる。こうした地元住民のまちに対する思いやまちづくりの姿勢が、外部の介入はありつつも佐原本来の姿を大きく崩すことなく存続している理由かもしれない。持続可能なまちづくりには、そのまちの強い信念と柔軟性が大切であるということが佐原のまちづくりから分かる。

終章　おわりに

観光は地元の人々にとっては､誇らしいこと･恩恵を受けるものになるという側面はありつつも、生活する上では厄介な存在ともなりうる。それは、観光地を決定づける要因というのは、観光客やその訪れる人が生きている社会やその制度によるものが多く見られるからだ。しかし、佐原のまちはそういった様子はあまり見受けられない。それは、まちづくりの上で、住民合意を大切にしてきたからなのかもしれない。また、“ホンモノ志向”というもモットーの元、雰囲気の統一を無理に図ることはなく、ありのままを残してきたというところも重要であろう。滞在型ホテルといった新しい取り組みはありつつも、共存ができている。

観光地とは、観光客が訪れる場所であると同時に、地元の人々が生活をする場でもある。持続可能な観光地をつくる上では、やりすぎない・無理しないということが一つ重要になってくるのかもしれない｡佐原というまちの観光地としての､そして地元住民が生活する場としての持続可能性は、「佐原本来の町並みの保存・活用」を見失わないことが鍵になっていくのだろう。その他の地域にとっても、その地域が持つ本質を見失わずにいることが重要である。

○主要参考文献

・佐原商家町ホテル NIPPONIA ホームページ https://www.nipponia-sawara.jp/concept（最終閲覧日 2024 年 1 月 31 日）

・ジョン・アーリ,ヨーナス・ラースン著,加太宏邦訳（2014）『観光のまなざし』法政大学出版局

・白井ら著（2009）「旧佐原地区におけるまちづくり型観光政策の形成プロセスとその成立要因に関する分析」『社会技術研究論文集』Vol.6,p.93-106.

・高山陽子編（2017）『多文化時代の観光学-フィールドワークからのアプローチ-』ミネルヴァ書房

・西川克之ら編（2019）『フィールドから読み解く観光文化学-「体験」を「研究」にする 16 章-』ミネルヴァ書房

・文化庁文化財第二課伝統的建造物群部門編（2021）『伝統的建造物群保存地区制度実務の手引き』文化庁ホームページ https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/hozonchiku/pdf/93312701_02.pdf